No.158

地方自治体の政策への活用を前提とした住民意識調査の分析②
―滝沢地域社会に関するアンケート調査の重要度に着目して―

川嶋陽・堀篭義裕

2022 年 3 月 18 日

地方自治体の政策への活用を前提とした住民意識調査の分析②
―滝沢地域社会に関するアンケート調査の重要度に着目して―

川嶋陽[*]　　堀篭義裕[†]

令和 4 年 3 月 18 日

概要

本研究は、前稿（川嶋・堀篭、2021）に引き続き、岩手県滝沢市「令和 2 年度滝沢地域社会に関するアンケート調査」[1]を用いて住民意識の潜在要因を探るため、因子の抽出と因子得点の比較を行ったものである。

結果として、重要度に関する質問から共通因子を探り出すことができ、またその因子得点の平均値は、おおむね回答者の属性に応じて異なることが確認できた。しかし、同様の質問に対する満足度の因子分析結果に比べ、重要度における解釈は難しいものが出たこと、また満足度に比べて属性感の平均の差が見えづらい結果となったから、市民意識調査においては、満足度に比べ重要度の方が回答全体として差が出づらい可能性が示唆された。

1　研究の目的と現状

本稿は、前稿（川嶋・堀篭、2021）に引き続き、岩手県滝沢市「令和 2 年度滝沢地域社会に関するアンケート調査」を用いて住民意識の潜在要因を探るものである。したがって、詳細な背景や研究構成、調査自体の内容等については前稿を参照されたい。

2　研究の方法

2-1 分析に用いるデータ

本研究では、「令和 2 年度滝沢地域社会に関するアンケート調査」における問 1 のうち、重要度のデータ[1]を用いる。

問 1 は、「現在の滝沢市での暮らしの中で感じていること」について、全 45 の項目に関して問うたものである。各設問に対し、回答者が自分の感じ方（満足度）と重要度のそれぞ

[*] 岩手県立大学大学院総合政策研究科

[†] 岩手県立大学総合政策学部

[1] アンケートの正式名称は「令和 2 年度滝沢地域社会に関するアンケート調査」であるが、市民へのわかりやすさという観点から通称として「たきざわ幸福実感アンケート」という名称を使用しており、報告書も同様に「たきざわ幸福実感アンケート報告書」としている。

[1] データについては、滝沢市企画総務部企画政策課へ依頼し、提供をいただいた。また分析については、IBM 社の統計ソフトウェア「SPSS Statistics 28」を用いた。

れを回答するという形式であり、重要度について直接測定していることから、いわゆる顕在重要度[2]がわかるものとなっている。

重要度については、重要：5、やや重要：4、どちらともいえない：3、あまり重要でない：2、重要でない：1 の 5 段階評価で回答を得ている。回答の単純集計を表 1 に示す。

表 1 重要度に関する回答の単純集計

（%）

項目	重要:5	やや重要:4	どちらともいえない:3	あまり重要ではない:2	重要ではない:1	無回答
(1)自然環境に配慮する取り組みが行われている	43.2	33.3	13.4	2.1	0.7	7.3
(2)自然とふれあえる環境がある	41.3	35.3	13.8	1.5	1.1	6.0
(3)市に豊かな自然がたくさん残されている	47.7	32.7	11.5	1.2	0.7	6.3
(4)みんなで地域の夢の実現のために取り組むことができる	20.3	32.1	33.4	4.1	2.0	6.4
(5)隣り近所とのつきあいがある	31.2	36.3	20.5	5.0	1.5	5.6
(6)地域に安心できる防災の仕組みがある	49.2	30.8	11.2	0.8	0.3	6.1
(7)家族がお互いに支えあっている	65.1	21.3	6.5	0.6	0.5	6.1
(8)ボランティアやNPO活動が活発である	19.9	34.1	31.4	4.1	2.3	6.6
(9)地域の中に支え合う仕組みがある	29.4	37.3	24.2	1.9	0.8	6.4
(10)市に犯罪がない	60.9	15.1	11.8	1.6	0.7	6.2
(11)心身ともに元気で暮らせる	61.3	24.0	7.6	0.7	0.2	6.3
(12)老後が不安なく暮らせる	60.8	18.6	9.4	1.8	0.9	5.9
(13)子ども達が不安なく暮らせる	62.0	22.1	7.9	0.9	0.7	6.4
(14)一人ひとりの個性が尊重されている	23.1	30.6	31.0	5.2	2.2	6.2
(15)高齢者が自ら率先して活躍している	20.5	37.8	30.4	3.7	1.5	6.1
(16)健康や介護などを学べる「場」がある	27.3	36.1	24.2	2.9	2.8	6.0
(17)かかりつけの病院がある	61.6	24.1	6.9	1.2	0.2	6.1
(18)放課後の子どもの居場所がある	45.9	24.2	14.3	2.3	2.5	7.4
(19)安心して子育てができる	58.7	21.7	10.5	0.3	0.7	8.1
(20)交通安全が保たれている	57.0	20.3	10.5	1.9	2.7	6.0
(21)急病の時に病院に行きやすい	65.3	20.8	6.8	0.9	0.2	5.9
(22)交通の便がよく、移動がしやすい	50.4	30.2	8.5	1.8	1.4	5.0
(23)ずっと住みたいと思える市である	49.1	28.3	15.4	0.7	0.8	5.8
(24)市役所の仕事は信頼できること	50.7	23.4	14.1	2.4	1.7	5.5
(25)自ら学んだり、取り組める環境があること	24.0	35.5	29.9	3.3	1.4	6.0
(26)子ども達が生き生きとしていること	46.9	27.7	15.7	1.2	1.3	6.0
(27)自分の夢の実現のために取り組むことができること	25.9	31.7	31.2	3.3	1.9	6.1
(28)地域と学校との間で交流があること	36.5	31.7	20.4	1.6	1.2	6.9
(29)子ども達の体力・学力が向上していること	28.6	33.1	26.0	3.3	1.9	7.2
(30)スポーツに親しむ機会があること	20.3	30.9	32.5	5.4	3.2	6.5
(31)働く場があること	50.0	25.9	13.8	2.4	0.8	7.0
(32)農業の担い手がいること	39.7	27.7	18.9	3.7	2.4	7.1
(33)みんなが自分のやりたい仕事ができること	35.8	27.5	25.5	2.2	1.7	7.2
(34)子育てしながらでも安心して働くことができること	45.3	23.6	18.4	2.3	2.6	6.7
(35)市の特色を活かした産業があること	37.3	33.2	19.9	1.6	1.6	6.4
(36)地場産品が広く販売されていること	29.6	34.5	20.2	3.9	3.5	5.9
(37)伝統・文化が受け継がれていること	31.1	36.3	22.9	2.4	1.4	6.0
(38)チャグチャグ馬コの知名度が活かされていること	20.1	32.1	30.4	5.4	3.7	6.5
(39)伝統・文化や芸術に親しむ機会がある	36.4	33.2	20.7	2.9	1.5	5.3
(40)ボランティアやNPO活動が活発である	36.9	31.2	20.7	2.1	2.2	5.9
(41)同じ目的を持った人との交流があること	24.0	29.5	33.0	5.1	2.6	5.7
(42)地域間での交流があること	17.5	31.8	34.6	5.1	3.1	5.9
(43)必要なときに欲しい情報が得られること	30.9	35.2	23.9	2.7	1.3	5.9
(44)人々が集まり活動できる場所があること	24.7	33.8	26.4	4.1	3.4	5.6
(45)地域や世代を超えて市全体がつながっている	23.1	32.3	33.0	3.5	2.4	5.7

出典：「令和 2 年度たきざわ幸福実感アンケート報告書（滝沢市）」を基に筆者作成。

単純集計の結果を確認すると、まず全ての項目で「重要ではない」「あまり重要ではない」という回答よりも、「重要」「やや重要」という回答が圧倒的に多いことが見て取れる。また、半数以上の設問に対して「どちらともいえない」の回答が 20%を超えていることがわかる。

[2] 本稿では、直接回答者に尋ねた重要度を「顕在重要度」として表す。

本設問では、「わからない」という選択肢がないため、本設問における「どちらともいえない」という回答には、「わからない」という回答も相当数含まれると考えられ、このことが「どちらともいえない」の割合が多いことの一因となっている可能性がある。

ただし、前稿同様、先行研究では「どちらでもない」と「わからない」の解答選択は、どちらもほぼ同様の意味を持っているとされている（石田、2016）ことから、本稿では「どちらともいえない」という回答をそのまま分析の対象に含めることとする。

2-2 分析の方法

前述のデータについて、全 45 問を対象とした因子分析を行う。方法としては、カイザーガットマン基準により固有値 1 以上のものを因子とし、最尤法を用いる。また、市民一人ひとりの生活の各場面に関する設問であることから、設問間においては相関関係があるものと捉え、斜交（プロマックス）回転を用いる。

3　分析結果

3-1 重要度の分析結果

分析により抽出された因子とその相関について、表 3 及び表 4 に示し分析を行った。次に、抽出された因子に対して因子得点を求め、回答者を性別、年齢、仕事、居住年数及び居住地で分類[3]し、それらの平均値の差について、一元配置分散分析により検証を行った。

まず、抽出された因子についてみていく。第 1 因子は、生活における安全安心に関する項目に対する負荷量が高いことから、「安全安心」因子とした。第 2 因子は、多くの項目が含まれ解釈が難しいところではあるが、自分自身の行動に関する項目や人間同士の交流に関する項目に対する負荷量が高いことから、「自己実現・交流」因子とした。第 3 因子は、仕事に関する項目に対する負荷量が高かったことから、「仕事」因子とした。第 4 因子は、自然環境に対する負荷量が高く、「自然環境」因子とした。第 5 因子は、地場の産業と伝統・文化に関する項目に因子量が高く、「産業文化」因子とした。第 6 因子は、健康面に対する負荷量が高く、「健康」因子とした。第 7 因子は、子どもの教育に関する項目のみとなっており、「教育」因子とした。

[3] 前稿（川嶋・堀篭、2021）と同様に、サンプル数及び属性の性質を考慮し、各分類において一部属性を統合している。職種では、「会社経営者」「自営業」「専業農家」「兼業農家」を統合し、「自営・経営者（農家含）」とした。また居住地では、「小岩井」と「大釜」、「篠木」と「大沢」、「柳沢」と「一本木」をそれぞれ統合している。

表 3 重要度に関する因子分析の結果

因子名	設問	①安全安心因子	②自己実現・交流因子	③仕事因子	④自然環境因子	⑤産業文化因子	⑥健康因子	⑦教育因子
①安全安心因子	交通安全が保たれている	**0.904**	−0.176	−0.036	−0.025	0.078	0.018	0.012
	市に犯罪がない	**0.855**	−0.120	0.006	0.032	−0.053	0.091	−0.128
	老後が不安なく暮らせる	**0.775**	−0.066	0.106	−0.032	−0.086	0.197	−0.109
	放課後の子どもの居場所がある	**0.667**	−0.015	−0.142	−0.071	0.155	0.065	0.259
	市役所の仕事は信頼できる	**0.610**	0.158	0.027	−0.028	−0.035	−0.027	0.051
	交通の便がよく、移動がしやすい	**0.599**	0.039	0.044	−0.072	0.059	−0.011	0.028
	急病の時に病院に行きやすい	**0.530**	−0.075	0.056	−0.083	0.056	0.311	0.023
	子ども達が不安なく暮らせる	**0.515**	−0.069	0.129	0.019	−0.060	0.293	0.202
	子ども達が生き生きとしている	**0.487**	0.135	0.097	−0.047	0.052	−0.040	0.271
	子育てしながらでも安心して働くことができる	**0.473**	−0.088	**0.488**	0.004	−0.041	−0.075	0.137
	地域に安心できる防災の仕組みがある	**0.438**	0.215	0.028	0.246	−0.164	0.126	−0.081
	必要な情報がわかりやすく伝わる	0.386	0.115	0.182	−0.005	0.215	0.005	−0.061
②自己実現・交流因子	同じ目的を持った人との交流がある	−0.322	**0.733**	0.202	−0.064	0.059	0.125	−0.017
	地域間での交流がある	0.014	**0.715**	0.137	−0.091	0.094	−0.052	−0.128
	高齢者が自ら率先して活躍している	−0.009	**0.643**	−0.121	0.051	−0.003	0.053	0.228
	地域の中に支え合う仕組みがある	−0.002	**0.632**	−0.096	0.038	−0.035	0.260	0.034
	地域や世代を超えて市全体がつながっている	−0.113	**0.627**	0.171	−0.109	0.198	0.020	−0.027
	隣り近所とのつきあいがある	−0.077	**0.602**	−0.152	0.086	−0.031	0.204	−0.028
	自ら学んだり、取り組める環境がある	−0.143	**0.601**	0.117	0.026	−0.062	0.043	0.268
	自分の夢の実現のために取り組むことができる	−0.148	**0.560**	0.183	−0.036	−0.115	0.054	0.428
	ボランティアやＮＰＯ活動が活発である	0.236	**0.540**	−0.104	0.133	−0.065	0.081	−0.006
	健康や介護などを学べる「場」がある	0.332	**0.534**	−0.263	−0.016	0.075	0.032	0.109
	一人ひとりの個性が尊重されている	0.259	**0.532**	−0.021	0.047	−0.139	−0.051	0.137
	スポーツに親しむ機会がある	0.045	**0.516**	0.176	0.041	−0.018	−0.142	0.173
	人々が集まり活動できる場所がある	0.282	**0.512**	−0.003	−0.146	0.276	−0.108	−0.079
	地域と学校との間で交流がある	−0.154	**0.488**	0.099	0.022	0.137	0.008	0.309
	みんなで地域の夢の実現のために取り組むことができる	0.176	0.385	−0.072	0.328	0.000	−0.087	−0.007
	必要なときに欲しい情報が得られる	0.095	0.375	0.366	−0.063	0.064	0.070	−0.081
	ずっと住みたいと思える市である	0.005	0.266	0.106	0.003	0.045	0.189	0.111
③仕事因子	みんなが自分のやりたい仕事ができる	−0.030	0.040	**0.787**	0.032	−0.070	0.005	0.068
	働く場がある	0.196	−0.024	**0.706**	0.017	−0.187	−0.040	0.101
	農業の担い手がいる	0.095	0.016	**0.620**	0.106	0.050	−0.061	0.010
④自然環境因子	自然とふれあえる環境がある	0.076	−0.030	0.047	**0.868**	0.022	−0.065	−0.049
	市に豊かな自然がたくさん残されている	−0.152	0.016	0.069	**0.802**	0.056	0.056	0.003
	自然環境に配慮する取り組みが行われている	−0.132	−0.007	0.037	**0.723**	0.135	0.080	0.004
⑤産業文化因子	伝統・文化が受け継がれている	−0.049	−0.003	−0.001	0.118	**0.784**	0.074	0.000
	チャグチャグ馬コの知名度が活かされている	0.009	0.154	−0.240	−0.008	**0.698**	0.075	−0.006
	伝統・文化や芸術に親しむ機会がある	0.140	0.143	−0.034	0.111	**0.615**	−0.149	0.000
	地場産品が広く販売されている	0.301	−0.093	0.146	0.064	**0.546**	−0.071	−0.022
	市の特色を活かした産業がある	−0.171	0.085	0.317	−0.001	**0.476**	0.200	0.075
⑥健康因子	心身ともに元気で暮らせる	0.350	0.120	0.060	0.049	−0.056	**0.523**	−0.058
	家族がお互いに支えあっている	0.107	0.217	−0.088	0.050	0.001	0.357	0.080
	かかりつけの病院がある	0.193	0.203	−0.117	−0.023	0.108	0.344	0.038
	安心して子育てができる	0.327	−0.038	0.068	−0.013	0.096	0.331	0.317
⑦教育因子	子ども達の体力・学力が向上している	0.202	0.216	0.240	−0.005	−0.030	−0.027	0.386
	固有値	16.808	3.378	2.301	1.541	1.413	1.152	1.028
	因子寄与率（%）	37.352	7.507	5.112	3.425	3.140	2.561	2.285
	累積寄与率（%）	37.352	44.859	49.971	53.396	56.536	59.097	61.381

注：最尤法、プロマックス回転、太字は回転後の因子負荷量が 0.400 以上。

出典：筆者作成。

因子の相関をみると、「自己実現・交流」因子が「安全安心」「仕事」「自然環境」「産業文化」のそれぞれの因子に対して高い相関となっている。また、「産業文化」因子は「安全安心」「仕事」に対しても高い相関をもつことが見て取れる。

表 4 各因子の相関行列

因子名	①安全安心因子	②自己実現・交流因子	③仕事因子	④自然環境因子	⑤産業文化因子	⑥健康因子	⑦教育因子
①安全安心因子	1.000	0.504	0.489	0.392	0.520	0.213	0.322
②自己実現・交流因子	0.504	1.000	0.553	0.500	0.698	0.256	0.255
③仕事因子	0.489	0.553	1.000	0.200	0.630	0.249	0.350
④自然環境因子	0.392	0.500	0.200	1.000	0.395	0.298	0.175
⑤産業文化因子	0.520	0.698	0.630	0.395	1.000	0.178	0.308
⑥健康因子	0.213	0.256	0.249	0.298	0.178	1.000	0.197
⑦教育因子	0.322	0.255	0.350	0.175	0.308	0.197	1.000

出典：筆者作成。

まず、性別により回答者を分類した場合の平均値[4]を表 5 に示す。

結果として、「安全安心」、「仕事」、「産業文化」および「教育」の各因子について 1％水準で有意であった。また「自己実現・交流」については 5％水準で、「自然環境」については 10%水準でそれぞれ有意であった。なお、「健康」因子については統計的に有意な差は得られなかった。

平均値の比較から、女性は男性に比べ、全ての因子について相対的に重要視しており、特にも「自己実現・交流」因子と「自然環境」因子についてその差が大きいことがわかった。

表 5 各因子の因子得点に対する男女別平均値

因子名	男性（N=408）	女性（N=497）
①安全安心因子**	−0.169	0.146
②自己実現・交流因子*	−0.753	0.065
③仕事因子**	−0.116	0.103
④自然環境因子†	−0.577	0.056
⑤産業文化因子**	−0.131	0.111
⑥健康因子	−0.044	0.050
⑦教育因子**	−0.116	0.093

**:1％有意　*:5％有意　†:10％有意

出典：筆者作成。

続いて、年代により回答者を分類した場合の平均値[5]を表 6 に示す。

結果として、「仕事」、「自然環境」および「教育」の各因子について平均値の差は 1%水準で有意であった。また「自己実現・交流」については 5%水準で有意であり、その他の因子については、統計的に有意な差はみられなかった。

平均値の差をみると、「仕事」と「教育」の相対的な重要度について、35 歳～49 歳の年代がピークとなっていること、また「自然環境」については、年代が上がるにつれて相対的な

4 「安全安心」と「健康」については不等分散であったため、平均値同等性の耐久検定を行なった。

5 「安全安心」「仕事」および「自然環境」については不等分散であったため、平均値平等性の耐久検定を行なった。

重要度が増していることがわかる。

表 6 各因子の因子得点に対する年代別平均値

因子名	18歳～34歳（N=116）	35歳～49歳（N=235）	50歳～64歳（N=226）	65歳以上（N=329）
①安全安心因子	−0.041	−0.058	0.045	0.033
②自己実現・交流因子*	−0.025	−0.147	0.008	0.113
③仕事因子**	0.154	0.156	0.040	−0.183
④自然環境因子**	−0.137	−0.109	−0.002	0.140
⑤産業文化因子	−0.033	−0.046	0.054	0.013
⑥健康因子	0.000	0.048	−0.041	0.011
⑦教育因子**	0.098	0.152	−0.043	−0.117

**:1%有意　*:5%有意　†:10%有意

出典：筆者作成。

続いて、職種別により回答者を分類した場合の平均値[6]を表 7 に示す。

結果として、「仕事」と「教育」については 1 %水準で、「安全安心」については 5%水準で、「自己実現・交流」については 10%水準でそれぞれ有意であった。その他の因子については統計的に有意な差はみられなかった。

「自己実現・交流」については、学生の相対的な重要度が突出して高いことがわかる。また「仕事」と「教育」については、公務員およびパート・アルバイトにとって相対的に重要度が高い一方、無職にとっては相対的に重要度が低くなっている。

表 7 各因子の因子得点に対する職種別平均値

因子名	自営・経営者（農家含む）（N=76）	会社員等（公務員以外）（N=299）	公務員（N=50）	パート・アルバイト（N=124）	専業主婦（N=147）	学生（N=21）	無職（N=182）
①安全安心因子*	−0.099	−0.093	0.008	0.243	0.087	0.132	−0.024
②自己実現・交流因子†	0.086	−0.125	0.069	0.118	0.049	0.350	0.004
③仕事因子**	−0.033	0.026	0.287	0.294	−0.037	0.166	−0.254
④自然環境因子	−0.082	−0.046	0.025	0.034	0.034	0.031	0.067
⑤産業文化因子	0.031	−0.064	0.027	0.179	0.054	0.093	−0.067
⑥健康因子	−0.021	−0.034	0.221	0.119	−0.003	0.237	−0.039
⑦教育因子**	−0.048	−0.016	0.271	0.210	0.040	−0.103	−0.190

**:1%有意　*:5%有意　†:10%有意

出典：筆者作成。

続いて、居住年数別により回答者を分類した場合の平均値を表 8 に示す。

結果として、全ての因子について平均値に統計的有意差はみられなかった。このことから、

[6] 「安全安心」と「健康」については不等分散であったため、平均値同等性の耐久検定を行なった。

各因子の重要性については、居住地域による差はそれほど現れないという可能性が示唆される。

表 8 各因子の因子得点に対する居住年数別平均値

因子名	5年未満（N=86）	5年～9年（N=71）	10年～19年（N=163）	20年～29年（N=212）	30年以上（N=373）
①安全安心因子	0.035	0.000	−0.025	−0.022	0.015
②自己実現･交流因子	0.022	0.048	−0.144	−0.021	0.068
③仕事因子	0.171	0.091	0.059	−0.042	−0.059
④自然環境因子	0.073	0.151	−0.137	−0.038	0.054
⑤産業文化因子	0.119	0.069	−0.113	−0.009	0.017
⑥健康因子	0.058	−0.036	−0.055	0.059	−0.008
⑦教育因子	0.101	0.081	0.037	0.038	−0.084

**:1%有意　*:5%有意　†:10%有意

出典：筆者作成。

続いて、居住地別により回答者を分類した場合の平均値[7]を表 9 に示す。

結果として、「自己実現・交流」については 10%水準で有意であった。その他因子について平均値に統計的有意差はみられなかった。「自己実現・交流」については、姥屋敷、小岩井・大釜及び篠木・大沢といった、市内でも歴史が古い地区における重要度が相対的に高いことがわかる。ただし、有意差を踏まえれば、各因子の重要性については、居住地域による差はそれほど大きくない可能性も示唆される。

表 9 各因子の因子得点に対する居住地別平均値

因子名	小岩井・大釜（N=80）	篠木・大沢（N=35）	鵜飼（N=178）	姥屋敷（N=9）	元村（N=284）	室小路（N=60）	巣子･長根・川前（N=214）	柳沢・一本木（N=39）
①安全安心因子	0.114	0.256	−0.015	0.259	−0.039	−0.005	−0.007	−0.042
②自己実現･交流因子†	0.193	0.255	−0.029	0.656	0.025	−0.122	−0.100	−0.040
③仕事因子	0.104	−0.111	−0.030	0.430	0.024	−0.039	0.025	−0.083
④自然環境因子	0.118	0.300	0.033	0.090	0.008	−0.045	−0.084	−0.113
⑤産業文化因子	0.115	0.028	0.067	0.527	−0.005	−0.065	−0.101	0.079
⑥健康因子	0.017	−0.116	−0.012	0.080	0.026	0.317	−0.051	−0.124
⑦教育因子	−0.079	0.239	0.019	−0.524	0.004	0.191	−0.051	−0.012

**:1%有意　*:5%有意　†:10%有意

出典：筆者作成。

4　結果の考察

4-1　全体的な考察

結果を踏まえ、考察を行う[8]。

[7] 「自己実現・交流」の因子については不等分散であったため、平均値同等性の耐久検定を行なった。

[8] 前稿で実施した満足度分析の結果と、本稿の重要度分析の結果を併せた考察については稿を改めることとし、本稿では重要度に絞っての考察を行う。

まず本研究における結果として、滝沢市における市民意識調査に対し因子分析を用いることで、重要度に関しては 45 個の意見項目を 7 個の因子に集約できることが示された。また因子得点の平均値として現れた、生活の各場面における満足度は、おおむね回答者の属性に応じて異なっている傾向にあることが確認できた。

ただし、一部の因子については解釈が難しい結果となった。単純集計をみると、「どちらともいえない」という回答の割合が大きいことに加え、全体的に「重要」よりの回答が多く、「重要な項目」と「重要でない項目」に分かれていないことがわかる。これによって、共通の因子を探り出しづらくなり、解釈の難しい因子の抽出につながったものと考えられる。

4-2　属性別平均値からの考察

次に、属性別の平均値比較を踏まえての考察を述べる。

まず、属性別の平均値からは、市民それぞれのライフステージの変化に合わせ、重視する項目も変化していることが示唆された。このことは、例えば年代別平均値において「自然環境」の重視の度合いが年代の上昇と対応していたことや、「仕事」の重視の度合いが実際に働いていると思われる年代で高く、引退後と思われる年代では低くなっていることから見て取れる。したがって、市民意識調査を基にした政策展開を考える上では、市民のライフステージの変化を検討材料の一つに含めることも必要となろう。

またこれに関連して、市民は自分が直接関係および意識している項目に対して重要視するということも示唆された。例えば職種別比較の「仕事」では、公務員とパート・アルバイトが高い一方、仕事をしているはずの自営・経営者ではあまり高くないという結果が出ている。このことは、パート・アルバイトの中には、安定しない雇用についての悩みを抱く人や、正社員としての仕事を探している人が含まれていると考えられ、また公務員は業務の中で、職を失った人を含め社会的に困窮している人や困っている人と接することが多い。したがって、パート・アルバイトでは「自分にとっての仕事の重要性」を、公務員にとっては「他人（人間全体）にとっての仕事の重要性」を日常的に考えており、それが高い重要度として表れているものと考えられよう。他方で、農家や経営者といった職種においては、仕事というものを自分の生活の一部として当たり前に存在しているものであると捉えているため、特別に重要視することはないということが表れているとも考えられる。

職種別の「教育」についても、公務員とパート・アルバイトにおける相対的な重要度が高く、公務員には教員も含まれるため、教育現場に接しているまたは直接関わっていることが他の職種と比較して多いこと、またパート・アルバイトについては、実際に子育て中の親が多く就いている可能性が高いと考えられる。これらからも、自分の生活の中で直接関わっている項目であるからこそ重要度も高くなったことが推測される。

一方で、属性別にみても満足度に比べて平均値の差が見づらい結果となった点にも着目すべきであり、これは居住年数及び居住地域に関する結果から見て取れる。これらの属性別結果に比べ、性別や職種等の属性別結果の平均値の方が見やすい結果となったことを踏ま

えれば、住環境といった外部的なものよりも、自分自身の状況のような内部的なものの方が重要度の差に影響を与えるという可能性が示唆されている。

5 おわりに

本節では、市民意識調査における重要度自体についての考察と、本稿を踏まえての今後の課題を述べる。

5-1　市民意識調査における重要度に関する考察

重要度に関して因子分析を用いた本研究では、分析の過程で、多数の設問が特定の因子に集中したことにより、解釈の困難な因子が抽出された。この点で、本研究と同一の設問における満足度を分析した前稿（川嶋・堀篭、2021）の結果[9]と異なっており、市民意識調査における回答選択の行動等が、満足度と重要度では異なっているということ、また市民意識調査において、項目間の重要度に大きな差がないという可能性が示唆された。

「満足かどうか」という質問に対する市民の回答プロセスを考えれば、自分や周りの現在および過去を考慮し、実際の経験と照らして、自分が満足と感じているか否かという判断を行うものと考えられる。したがって、自分の経験という基盤に基づいて考えるため、各設問について「満足か否か」という肯定・否定の振り分けを行いやすい。設問同士にある程度の相関があることを踏まえれば、肯定される分野と否定される分野は、回答者の属性による傾向が出やすい[10]と思われる。

一方で、「重要かどうか」という質問に対しては、先行研究により「社会常識として重要とされている項目の重要度が、実際より高く出る問題がある」（田辺、2009）ことや、回答者が多くの項目について重要であると答える傾向があり、結果として重要度の項目感の差があまり出づらい（Garver, Michael S、2003）ということが言われている。

重要度の回答に際しては、現在と過去の経験に加え、考慮する材料として「現在は自分にあまり関係がないものの、今後関係する可能性があること」が含まれると考えられる。具体的には、時間の経過によって生じる「若者にとっての老後」や、社会環境や生活環境の変化によって生じる「有職者にとっての地域福祉的制度」などが挙げられる。こうしたいわば「もしもの場合」や「現在は重要ではないが、今後重要となると思われること」までを考慮して重要度の回答を行いうるであろう。そのため、重要であるとされる項目は、満足度に比べると総花的になりやすく、項目間の重要度に差が出づらくなるということが考えられる。

例えば、「老後が不安なく暮らせる」という質問に対して、若者が満足度および重要度を回答する場合を考えてみる。若者は、現時点では自分の経験として老後の状態や経験を持ち得ておらず、自分にとっての老後の暮らしについてはわからない。したがって満足度につい

---

[9] 満足度の分析結果では、一定の共通性を持つ分野で構成された解釈の容易な因子が抽出されている。

[10] 満足度の因子分析の結果から、類似の項目につづけて回答していくことにより中間選択が増える（増田、2018）ことを踏まえてもなお、重要度に比べて満足度は回答者の傾向が出やすいと考えられる。

ては「わからない」または「どちらでもない」という回答になることが考えられよう。他方、重要度については、「今後自分が老後の状態になったら」と想像した上で、自分にとって重要か否かを回答することができる。

もちろん、上記の例で言えば、高齢者と同居している若者が普段の生活で感じている部分を自らの経験として満足か否かという回答を行うこともありうるが、回答に際して考慮する事柄の違いを踏まえれば、本研究の結果として満足度と重要度の分析結果の違いが出たことは自然な結果とも考えられる。

なお、市民意識調査における重要度自体に関して、アンケート調査で回答者の重要度を測定する方法としては、質問項目として設定し直接聞く手法と、満足度のデータから統計的に重要度を算出する方法の二つがよく使われており、前者は顕在重要度、後者は潜在重要度[11]とも呼ばれることがある。本研究に用いた「滝沢地域社会アンケート」では、前者の方法を用いており、研究結果からも前述の田辺（2009）や Garver（2003）といった先行研究を支持する結果が得られたことから、滝沢市における市民意識調査においても、これらと同様の課題があることがわかった。

5-2　今後の課題

今後の課題として、重要度に関する異なる分析アプローチを行った場合と今回の結果との比較が必要である。今回は、回答者が直接答えた重要度である「顕在重要度」の分析を行ったが、前述の潜在重要度との間に差が出るのかどうかという部分について明らかにしていきたい。仮に、自治体の実施する意識調査において、顕在重要度と潜在重要度の間に大きな差[12]があるようであれば、どちらの方法を用いて重要度を設定することが適切なのか、ということも検討する必要があろう。このことを明らかにすることができれば、滝沢市における市民意識調査をよりその目的に適したものへ昇華させることにもつながると考えられる。

また、自治体の意識調査では「満足度と重要度の差をニーズ度として把握する手法が一般的」（和川、2013）とされていることから、重要度と満足度の関係についての分析も今後行うこととしたい。現在、滝沢市においても、満足度と顕在重要度のそれぞれの平均値から散布図を作成し、「満足度が低く重要度が高い項目および分野」について、「市民のニーズが高い部分である」というように捉えている。しかしながら、そのように導き出された「市民ニーズの高い」分野と、実際の市政の現場において「市民のニーズが高い」と感じる分野は必ずしも一致していない、ということも筆者の実感としてある。このことについても、前述の「顕在重要度と潜在重要度の関係」を明らかにした上で、CS ポートフォリオ分析の手法な

---

[11] 目的変数としての総合的な満足度評価と、それに関係する評価要因としての各項目満足度をそれぞれ調査し、目的変数と各評価要因の相関係数を算出し、それを各評価要因の重要度として捉える考え方（鈴木・沼田、2010）であり、本稿ではそれを潜在重要度と呼んでいる。

[12] （和川、2013）では、岩手県の意識調査を用いたケーススタディにより、県レベルにおける意識調査では潜在重要度と顕在重要度が一致しないことが示されている。

どを使用しながら重要度と満足度を用いて、より確かな市民ニーズを探ることができるよう分析を行っていくこととしたい。

参考文献

［1］． 石田賢示「『どちらともいえない』と『わからない』は何を意味しているのか：定住外国人の受け入れに対する態度を事例として」東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト　ディスカッションペーパーシリーズ、No.97、2016 年 8 月

［2］． 大谷信介『これでいいのか市民意識調査』ミネルヴァ書房、2002 年

［3］． 小木曽道夫『SPSS によるやさしいアンケート分析』オーム社、2006 年

［4］． 川嶋陽・堀篭義裕「地方自治体の政策への活用を前提とした住民意識調査の分析①―滝沢地域社会に関するアンケート調査の満足度に着目して―」岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパーシリーズ、No.155、2021 年

［5］． 鈴木聡士・沼田真吾「CS 分析を活用した札幌都心の質的満足度評価」『工学研究』北海学園大学大学院工学研究科紀要、10 号、2010 年

［6］． 高嶋裕一・和川央「多くの変数を含むデータの解析について－岩手県県民意識調査の分析事例」岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパーシリーズ、No.53、2010 年

［7］． 滝沢市「令和 2 年度滝沢幸福実感アンケート報告書」2021 年 10 月 11 日最終閲覧 [https://www.city.takizawa.iwate.jp/var/rev0/0102/4848/1213191683.pdf]

［8］． 滝沢市『第 1 次滝沢市総合計画』滝沢市、2014 年

［9］． 田辺智子「『満足度』と『重要度』を用いた業務分析～国立国会図書館の利用者アンケートをもとに～」『現代の図書館』vol.47　No.1、日本図書館協会、2009 年

［10］. 内閣府「全国世論調査の現況　令和 2 年度版」2021 年 10 月 11 日最終閲覧 [https://survey.gov-online.go.jp/genkyou/r02/r01-genkyou/csv/h202.csv]

［11］. 増田真也「社会調査での回避行動に対する実験的アプローチ」『基礎心理学研究』第 36 巻第 2 号、日本基礎心理学会、2018 年

［12］. 増田真也、坂上貴之、川畑秀明、木島信彦、星野崇宏「日本人の幸福感は低いのか？：過度の中間選択の原因」日本行動計量学会大会抄録集 44、日本行動計量学会、2016 年

［13］. 松尾太加志・中村知靖『誰も教えてくれなかった因子分析－数式が絶対に出てこない因子分析入門－』北大路書房、2002 年

［14］. 三土修平『数学の要らない因子分析入門』日本評論社、2001 年

［15］. 和川央「自治体が実施する意識調査における重要度情報の意義」『日本地域政策研究』第 11 号　p63-p71、日本政策地域学会、2013 年

［16］. Garver,Micheal,S. “ Best practices in identifying customer-driven improvement opportunities” *Industrial Marketing Management*,32,p458,2003

［17］. Sturgis,P., Roberts,C., & Smith,P. “Middle alternative revisited: How the neither/nor response acts as a way of saying “I don’t know”?” *Sociological Methods & Research*,43,p15-p38、2014